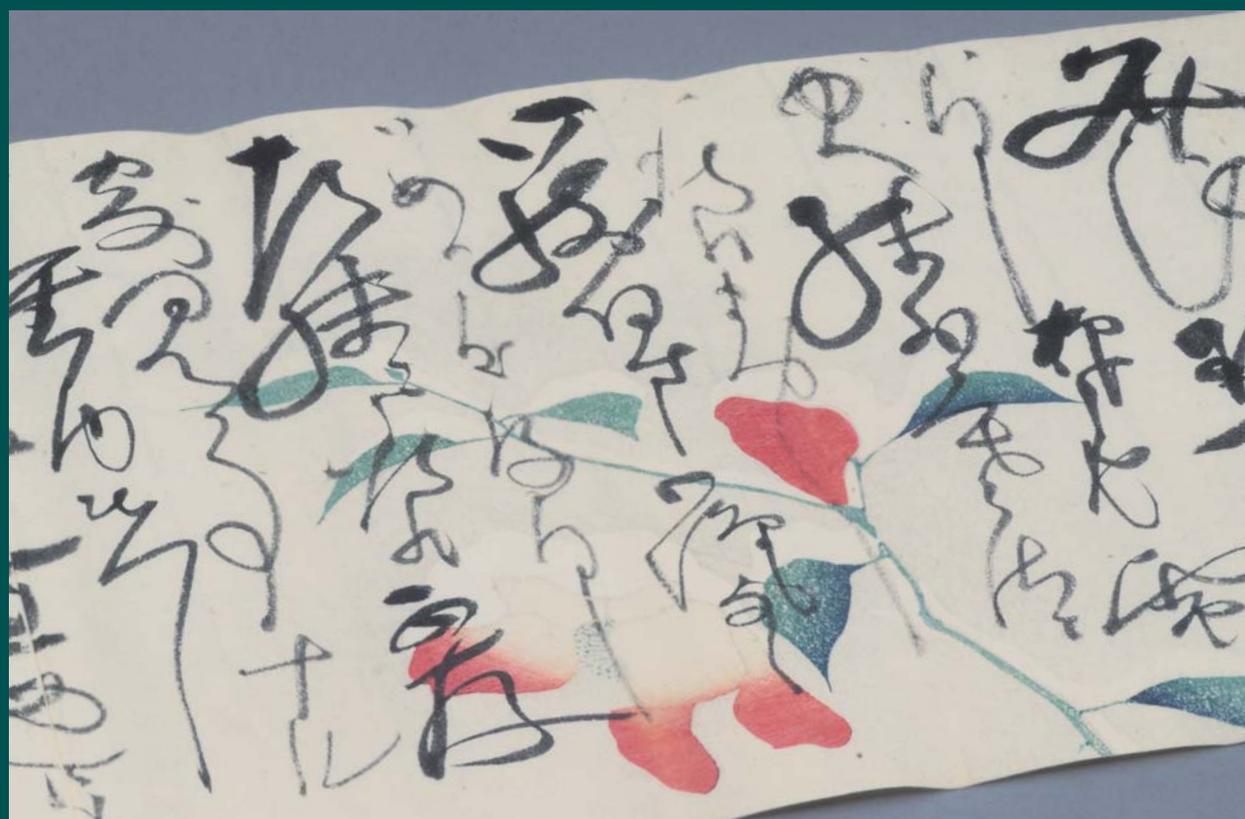




徴古館報 第29号 2015年(平成27年)1月発行



長女貞姫宛て鍋島直正書簡 (安政2年/1855)12月6日付

## 10代佐賀藩主鍋島直正公 生誕200年記念事業

10代佐賀藩主鍋島直正公(関叟／1814～71)は、藩政・教育・軍事改革や産業振興など先進的な取り組みを推進し、幕末佐賀藩を雄藩にした名君として知られています。今年が生誕200年にあたるのを記念し、徴古館では昨年度より7回の企画展を中心に記念事業を行っており、うち3回の内容は図録『鍋島直正公』(1,000円)にまとめました。本号では今年度開催した第67回展「鍋島直正の側近たち」、第68回展「鍋島直正の本音 ―愛娘への手紙から」の企画展のほか雅楽演奏会についてご紹介します。なお、現在は最後の関連企画展「鍋島直正公御一家展」(平成27年1月5日～31日)を開催中です。

## 徴古館 第67回企画展

## 鍋島直正の側近たち



平成26年7月28日(月)から9月13日(土)まで、第67回展「鍋島直正の側近たち」を開催しました。

本展は、直正公の生い立ちから藩主就任までの歩みを両親はじめ、お付女中や侍講らとの関わりから辿った第66回展「幕末佐賀名君誕生」展に続く内容として、藩主時代の直正公

を取り上げました。

直正公は天保元年(1830)に17歳で就任し、48歳で隠居するまでの30年間、10代佐賀藩主として激動の時代の佐賀藩の舵取りをつとめました。この間、外国船の来航という新たな時代に対処すべく、佐賀藩では次々と新しい事業が展開され、その先進的な取り組みは、結果として近代の礎ともなりました。本展ではこの時代の成果や近代に引き継がれた側面だけではなく、当時どのような藩士が奮闘し、藩主直正公はどのような指示や言葉を彼らにおくったのか、藩士との関係を物語るトピックも交えながら藩主直正公を描き出しました。

直正公の側近中の側近は、幼少期より直正公のお遊び相手であり、明治4年(1871)直正公逝去の3日後に殉死した古川松根(1813～71)です。のちに久米邦武が「常に景随して左右を離れず尽くし、公(直正公)亦これを離すこと能わず」(「古川松根純忠之碑」)と評したほどでした。松根が記した直正公の言行録「古川松根筆記」には、藩士への気配りが窺われる一節が語られています。天保8年(1837)、老中脇坂安童を訪れた24歳の若き直正公は、長崎警備に熱心な佐賀藩について藩主自身と「優れたる御家臣」を称賛されます。藩邸に帰った直正公は、早速この事を側近永山十兵衛に伝え、自らへの称賛は当たらないが、「家来によきもの数多もてりとの事は殊に悦び」、佐賀の鍋島安房らに伝達するよう指示を出したと言います。



堆朱根付杵葉紋金具付胴乱  
縦11.5cm 横15.5cm 厚さ4.0cm  
公益財団法人鍋島報効会 所蔵

箱書に「嘉永二年己酉四月廿三日 拝領 古川松根」と松根の手で墨書されており、直正公からの拝領品とわかる。「古川松根筆記」には、直正公は手回り品に家紋の杵葉紋を濫用することを好まなかったという一節がある。杵葉紋の特別な扱いを知る松根への拝領品である。胴乱とは薬・印・煙草・銭などを入れて腰に下げる方形の袋のこと。これは堂々とした鍋島家の家紋である杵葉紋の金具をつけた革製胴乱で、元は直正公の手回り品と思われる。高松藩の漆工・玉橋象谷の手になる牡丹を彫漆した堆朱の根付を併用。

これに類するエピソードが、幕末佐賀藩にとって最大の事業のひとつである長崎警備のための両島台場(長崎湾の神ノ島・四郎島および伊王島に築造した台場)に関して、台場の責任者伊東次兵衛の日記「胸秘録」に記されています。嘉永6年(1853)、開国を求めて長崎に来航したロシア船に対して、佐賀藩が築造したばかりの両島台場が防衛上の効果大であったことを直正公は耳にします。そこで直正公は次兵衛に命じ、「ロシア船が台場の備えに畏縮していたこと、幕府の役人も称賛していたこと」を、現場で働く藩士にいち早く伝達させました。またのちに、次兵衛と主に製砲を担っていた本島藤太夫に対しては、古川松根を通じ内々に「窓の酒」一樽を贈りました。

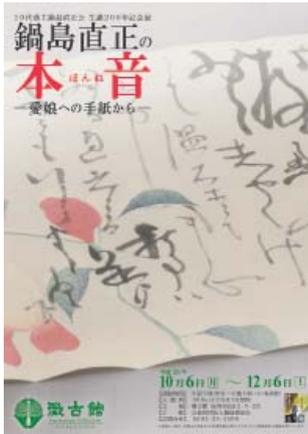
直正が幼少期から熟知していた藩祖鍋島直茂の壁書には、「人間は下程 骨折り候事、能く知るべし」の一節があります。外国船の畏縮と幕府からの称賛という第三者の高評価を現場の藩士にいち早く伝え、責任者は特別に褒賞する。藩士のモチベーションに対する藩主直正公の配慮がうかがえる記述です。

鍋島直正和蘭船乗込図  
古川松根 筆 弘化元年(1844)  
縦30.0cm 横1389.5cm  
公益財団法人鍋島報効会 所蔵

天保15年(1844)、オランダ国王の開国勸告書を携えた使節船パレンバン号が長崎に入港すると、直正公は長崎警備のため軍艦の構造を知っておきたいと長崎奉行に申し出て乗船の許可を得る。本図は直正公が乗船し視察したときの様子を、随行した側近の古川松根が描いた記録画。船に乗り込む第一図に始まり、船内での飲待を経て薬品室、飼育室、医師室、酒庫、貯水庫などを巡視し、櫓や大砲の操縦、小銃や弾丸の扱いについてレクチャーを受ける様子などが18の場面に渡って描かれている。



## 鍋島直正の本音 ー愛娘への手紙から



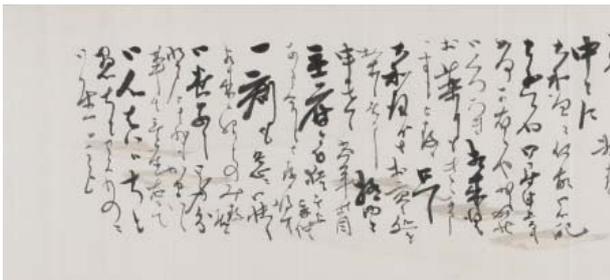
平成26年10月6日(月)から12月6日(土)まで、長女貢姫に宛てた書簡から直正公の人柄や思想を読み解く第68回展「鍋島直正の本音 ー愛娘への手紙から」を開催しました。

天保10年(1839)に佐賀城で誕生した貢姫は、直正公の藩主就任10年目での第一子でした。正室

による養育のため7歳で江戸に赴き、やがて父と娘の文通が始まります。嘉永7年(1854)頃以降、13年間程での父からの手紙を貢姫は大切に保管し、現在約200通が現存しています。娘の心身を案じる親心を伝え、佐賀の家族の近況をユーモアを交えて書き綴り、佐賀の特産品を江戸まで贈ることもしばしばでした。幕末の国内情勢や外国人観などに至るまで、直正公の「本音」が語られた選りすぐりの23通を、雅趣あふれる料紙と直筆の書の魅力とともに紹介する企画でした。

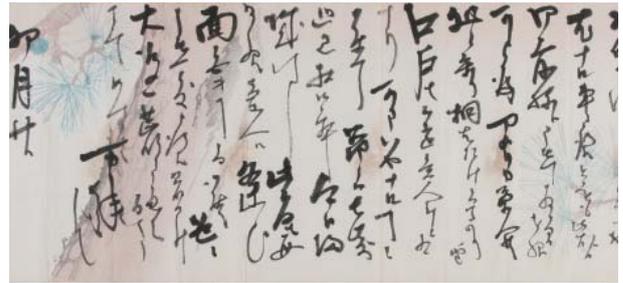
### 愛娘を案ずる親心 (安政4年/1857)7月9日付

貢姫は安政2年(1855)、川越藩主松平直侯に嫁ぎました。直侯は翌年川越に下り、安政4年に着府。この頃から奥に籠りがちな傾向を見せたようで、直正公も7月頃にはその様子を知ります。7月9日付のこの書簡では、貢姫はじめ川越藩邸関係者への気遣いを記した上で、特に貢姫に対しては、「大和さま(直侯)よりは、お貢之処を案し居申候、極内々申遣候」と親心をダイレクトに伝えています。



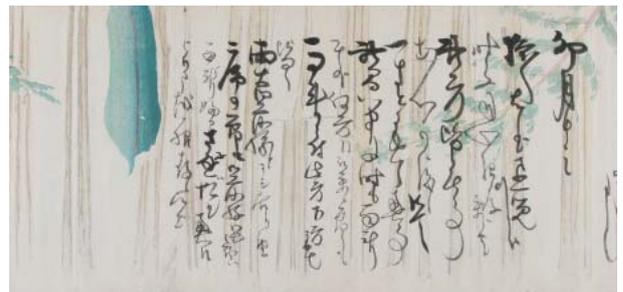
### 直正公の外国人観 (安政5年/1858)4月20日付

貢姫からの書簡で直正公は、「アメリカ・蘭人共処々参り、桐はたけにて馬のり候」という江戸の様子を知ります。桐畑は佐賀藩溜池中屋敷に至近の場所。江戸の内地を外国人が乗馬する状況に対し「江戸は遠からず、異人計りに相なり申すべし、いやナル事に御座候」と嫌悪感を示しています。一方で、昨日までの長崎巡見では、「毎日之様、蘭人へ逢ひ面白キ事にて御座候」と言い、長崎での秩序ある形での交流は好奇心を満たす格別のものだったようです。



### 妻と娘をむすぶユーモア (慶応2年/1866)4月13日付

直正公の継室筆姫は文久3年(1863)佐賀に下国します。佐賀では時に直正公らとともに、神野御茶屋など城下郊外へ外出することもあったことが他の書簡からわかります。この書簡では、先日筆姫が伊万里(佐賀藩領)へ出かけた際にも雨が降ったほか、筆姫の外出時は決まって雨ばかりなため、下の者が筆姫を「雨大御前様」と呼んでいると伝えています。これを直正は咎めるわけではなく、貢姫と共有し、今度機会があれば「雨ばかり降るそうですね」と筆姫に伝えて(からかって)みてはどうかと促すなど直正公のユーモアが感じ取られる一節です。



## 鍋島直正公生誕200年記念

### 雅楽演奏会

雅楽を嗜んだ直正公にちなみ、東京を拠点に活動をされている伶楽舎のみなさんによる演奏会を平成26年11月9日(日)に徴古館で開催しました。直正公や宮内省式部長をつとめた11代直大公所用の雅楽器を実際に用いた演奏のほか、直大公自作の楽譜の復元演奏、鍋島家伝来の催馬楽譜(国宝)や東遊歌神楽歌(重要文化財)にちなみ、催馬楽「青柳」や御神楽「千歳」の演奏など、当館ならではの演奏会となりました。直正公銅像再建チャリティー茶会も同時開催し、80名を超える聴衆の方々には、伝統文化に浸る秋のひと時を満喫して頂きました。



## 「佐賀城下絵図を読み解き、まちづくりに活かそう!! (第三弾)」

当財団所蔵の7期分の佐賀城下絵図を中心とし、関連資料の活用により佐賀城下に光を当てる標記事業は6年目を迎えました。今年度は、藩士名簿資料の調査や入力等の基礎的作業(人名データベース)と、城下のまち歩きを通して歴史を再認識し、今後のまちづくりに繋げることを目的とした佐賀城下探訪会(4回)を行いました。

### 佐賀城下探訪会

これまでに蓄積した城下絵図データや人名データベース、城下武家地の土地台帳である屋敷帳などをもとに、各テーマに沿ってゆかりの地をめぐる探訪会。平成21年以降、昨年度まで21回実施しました。今年度は鍋島直正公の生誕200年を記念し、直正公や幕末佐賀藩ゆかりの地を4回に分けて探訪しました。(カッコ内は参加者数)

第1回 9月21日(112名)

#### 「鍋島直正が愛した金立・川上」

直正公がしばしば訪れた景勝地川上や河畔に設けた別荘十可亭跡、侍講をつとめた古賀穀堂の墓などを探訪。

第2回 10月19日(107名)

#### 「鍋島直正が訪ねた城下北郊」

城下北郊に集中的に設置された多布施反射炉・精煉方・築地反射炉・中折訓練場などの科学技術・軍事関係の跡地を訪ね、多布施川を北上し石井樋まで探訪。

第3回 11月16日(122名)

#### 「鍋島直正を支えた側近たち」

城内内に居住していた直正公の側近を中心とする幕末佐賀藩士約20名の屋敷地の場所を屋敷帳から特定し探訪。

第4回 12月7日(126名)

#### 「長崎警備の拠点 一深堀・諫早」

初代鍋島勝茂の時代から続く長崎警備は直正公の時代に両島台場築造をはじめ飛躍的に充実した。警備の拠点であった深堀(長崎市)と諫早(ともに佐賀藩領)を探訪。



第2回「鍋島直正が訪ねた城下北郊」(写真:築地反射炉跡)



第3回「鍋島直正を支えた側近たち」(写真:佐賀城の門)

平成26年度 今後の企画展

## 「鍋島家の雛祭り」展

2015年2月21日(土)～3月31日(火)



徴古館では毎年恒例の「鍋島家の雛祭り」展を開催します。長さ6mと5mの二つの大雛壇飾りに並ぶのは、侯爵鍋島家(旧佐賀藩主)で、ご家族の息災、お子様の健やかな成長を願い実際に飾られていた雛人形・雛道具約300点。明治から昭和初期にかけての三代にわたる侯爵鍋島家歴代夫人が愛しんだ雛飾りです。大雛壇の迫力と愛らしい御人形、細やかな雛道具の世界を存分にご堪能ください。

そして今年の特別展示は、11代直大公の栄子夫人がお持ちになった櫛や簪などの髪飾り。とりわけ簪の装飾は、多彩なモチーフと精緻を極めた技巧が見どころです。一粒に「いろは」47文字が書き込まれた米粒、房に7つの極小の真珠を嵌めた葡萄、48枚の花びらからなる菊などを、わずか1～2cmで表す精妙な技巧には息をのむばかりです。愛らしい雛人形・雛道具とともに、装身具の精緻な世界をぜひご覧ください。

徴古館報 第29号 2015年(H27)1月発行

公益財団法人 鍋島報効会

〒840-0831 佐賀市松原2丁目5-22

TEL・FAX (0952)23-4200 MAIL info@nabeshima.or.jp

URL http://www.nabeshima.or.jp